

コロナ禍の今こそ考えたい 中国と東アジア秩序の変容

【評者】
防衛研究所主任研究官
佐竹知彦



新型コロナウイルスの蔓延により、米国のリーダーシップや多国間主義の衰退、そして自国主義の台頭といった国際秩序の軋みは、いっそう顕在化した。ウイルス蔓延の責任追及と国際機

関批判に躍起となる超大国の指導者を尻目に、強権的な手法で感染の封じ込めに成功した中国は、国際機関や地域での政治・経済・軍事的な影響力の強化に向けた動きを着々と進めている。

こうした動きが地域の秩序構造に及ぼす影響は未知数だが、少なくとも中国が、今回のコロナ禍を国際秩序の再編に向けた奇貨と捉えていることは想像に難くない。

- ① **中国の行動原理**
——国内潮流が決める国際関係
益尾知佐子・著
中公新書、2019年
- ② **海の地政学**
——覇権をめぐる400年史
竹田いさみ・著
中公新書、2019年
- ③ **冷戦後の東アジア秩序**
——秩序形成をめぐる各国の構想
佐橋亮・編
勁草書房、2020年
- ④ **米国と戦後東アジア秩序**
——中国大国化構想の挫折
高橋慶吉・著
有斐閣、2019年
- ⑤ **The Crisis of Liberal Internationalism:
Japan and the World Order**
Yoichi Funabashi and G. John Ikenberry・編
Washington D.C.: Brookings Institution Press, 2020

①は、中国の対外的な行動原理をその階層的な秩序観や強烈なりアリズムに基づく世界観に加え、家父長制に基づく権威主義的な国内の社会秩序構造に求める。中国の対外政策は、絶対的な権力を持つ指導者の考え方や、その国内統制力によって大きな影響を受けてきた。著者によれば、習近平体制下の国内統制の強化により、中国外交は当面の間「お行儀のよい」ものとなる可能性が高いが、それは同時に中国が自由主義から遠ざかることを意味する。トランプ大統領の仕掛けた貿易戦争は、中国の人々の反発と一体感を強めることで、権威主義体制の強化にいつそう貢献している、と著者は指摘する。

②は、海洋覇権と海洋秩序の形成をめぐる四〇〇年にも及ぶ歴史を、新書というコンパクトなサイズにまとめている。「航行の自由」をはじめとする

海洋規範や秩序の確立の裏には、常にその時々々の覇権国や大国の利害が存在した。同時に著者は、二〇世紀における国連海洋法条約の形成を、覇権国だけでなく、中小国を含む様々なプレイヤーによる利害調整の結果として描く。中国の挑戦する秩序とは、まさにそうした国際社会の努力によってもたらされた硝子細工のような秩序である。

③は、比較的若い世代の研究者による、冷戦後の東アジアの秩序形成に関する共同研究の成果である。米国のみならず、日本や豪州、韓国、ASEAN、インド、ロシアや中国の「秩序構想」を明らかにし、その秩序形成への「インパクト」を分析することで、アメリカ主導か中国主導かという二元論に陥りがちなこの地域の秩序論に、新たな視座を提供している。

東アジアの国際秩序を歴史的観点から考える上で興味深い業績が、④であ

る。第二次世界大戦に参戦した米国は、ローズヴェルト大統領のもと、日本の「無力化」を追求する一方で、国際秩序の共同管理国としての中国の「大國化」を図った。ところが、国共調停の挫折以降、米国は国府による中国の大國化よりも、日本をパートナーとした東アジア政策に重点を置くようになる。歴史上「if」は禁物だが、仮に米国が国府による中国の統一を諦めていなければ、その後の東アジア秩序はどのようなものになっていたであろうか。

著名なジャーナリストと国際政治学者によって編纂された⑤は、自由主義的な秩序の担い手としての日本の可能性について、対外政策と国政(statercraft)双方の観点から多面的に考察している。今回のコロナ禍を、国際協調主義の復権にむけた好機とするために、日本が果たすべき役割は大きい。●

交錯する二つの国際秩序に 近代日本はどう臨んだか



【評者】
同志社大学教授
森靖夫

二〇一九～二〇年は、日本政治史研究にとって豊作の年だった。まず、二〇年以上にわたり学界を牽引してきた一九五〇年代生まれの世代による、総決算的研究を二冊紹介したい。

①は、史料翻刻、オーラル・ヒストリー編纂、歴史認識問題、歴史和解問題、ユネスコ世界記憶遺産登録といった広範な自身の取り組みを総括する。本書を通じて、「歴史はいかにして歴

史になるのか」考えさせられると同時に、研究者たち自らが、史料閲覧・一般利用のためのインフラ構築に多大な時間を割いてきたことを、改めて思い知らされるだろう。初学者のみならず、

①歴史に向きあう

——未来につなぐ近現代の歴史

黒沢文貴・著
東京大学出版会、2020年

②近代日本と軍部 1868-1945

小林道彦・著
講談社現代新書、2020年

③芦田均と日本外交

——連盟外交から日米同盟へ

矢嶋光・著
吉川弘文館、2019年

④国際連盟

——国際機構の普遍性と地域性

帯谷俊輔・著
東京大学出版会、2019年

⑤日本政治史

——現代日本を形作るもの

清水唯一朗・瀧井一博・村井良太・編
有斐閣、2020年

専門家も必読の書である。

②は、三〇年以上にわたる研究に裏打ちされた政軍関係史である。膨大な史料を丹念に読み込み、「常識」に挑戦する仕事ぶりはまさに職人芸。明治憲法の癌といわれた統帥権独立制の辿った道を自明のものとせず、さまざまな改革の試みと取りえた選択肢を示す。また本書は、軍人のみを主体として描くこれまでの類書とは一線を画す。「一卵性双生児」として出自(士族)を同じくする日本の政党と軍隊は、本来、水と油の関係ではなかったという冒頭の語りから、読者は一気に引き込まれるに違いない。

次に、これからを担う一九八〇年代生まれの世代による、エネルギーシュな著作を二冊紹介したい。③は、芦田均の再軍備論の思想的系譜を第一次世界大戦期にまで遡って再検討したものである。再軍備論はしばしば、民族主

義的な自主外交論と結び付けて理解される。しかしながら芦田の場合、国際連盟を中心とする普遍主義的国际秩序を理想に掲げながら、その理想が再軍備論に帰結したという。本来アンビバレントな関係にある「国連を中心とする集団安全保障」と「日米同盟」の双方に依って立つ現代の日本外交を考える上でも、本書は示唆に富んでいる。

④は、日・英・中複数言語の史料を駆使して国際連盟を政治史の立場から描ききった出色の作である。連盟史は、創設当初から普遍性に問題を抱える連盟が、一九三〇年代以降勃興する地域主義に直面し、機能不全に陥った、という結果論的ストーリーとして語られてきた。これに対して本書は、普遍主義と地域主義が相互に刺激しながら並行して発展したことを明らかにし、現在も続く普遍的国際機構と地域機構との共存関係へ連盟史を架橋することに

成功している。同時に、満洲事変をグローバル・ガヴァナンスの観点から再構成した点でも本書は刺激的である。ぜひ前掲書と併せて読みたい。

近年ロシアや中国が、普遍的な国際規範を「西側主導」であるとして、それに挑戦する軍事行動をとったことで、われわれが共有してきた普遍的価値は再び揺らぎつつある。そうした時代を読み解く上でも、近代日本の歩んだ道を顧みる意義は極めて大きいだろう。

最後に、現在の学界をリードする編者らによる通史も紹介する。⑤は、一八五〇～一九五〇年代の約一〇〇年の歩みを描く点でユニークだ。崩壊史ではなく、形成史として、日本の近代政治の歩みを理解することで、真の意味でわれわれは「過去を反省」し、「明日への糧」とすることができるよう。